

もりおうがい

森鷗外、都府楼に立つ

文豪森鷗外は文久2(1862)年、石見国津和野藩(現島根県鹿足郡津和野町)の典医の家柄に生まれました。早くから秀才と期待され、11歳で西周の世話により上京、明治14(1881)年7月には東京大学医学部を異例の年齢(満19歳8カ月)で卒業し軍医の道に進みます。足かけ5年のドイツ留学の後、軍医としてのキャリアを重ねるかたわら、医学や文学に限らず美学や哲学といったあらゆる分野で研究や評論活動を展開しており、芸術・学問に対する彼の情熱を思い知らされます。

37歳で近衛師団軍医部長兼軍医学校長となった鷗外は、翌年の明治32(1899)年6月、陸軍第12師団軍医部長として小倉に「左遷」されます。彼の九州での生活は「小倉日記」に詳しくつづられています。東京に転勤となる明治35年3月までの3年間、学究活動に関してはおおむね充実した時間を過ごしたらしく、九州の地でも旺盛な知識欲を満たすべく活発に行動しています。

「小倉日記」によると、鷗外は明治32年10月2日に大宰府を訪れます。夕刻太宰府に到着し、参道の旅館松屋に一泊。翌日、太宰府天満宮・観世音寺・戒壇院を巡り、水田の間に広がる大宰府政庁跡に至ります。なかでも草むらに隠起する礎石は、大いに鷗外の興味を引きました。ま

太宰府人物志

資料室だより③

ず親指と人差し指の間で礎石の直径を計測。「圏の径五たび展開して尽く」。そして歩数で礎石と礎石の間隔を計測。「初め街道より進みて、先ず礎石の一群に逢ふ。前後に三石、左右に五石を列す。此間前後に踏みて十一歩あり。又行くこと三十四歩にして一石あり。又行くこと六歩にして一石あり。又行くこと百三十二歩にして再び礎石の一群に逢ふ。前後に五石、左右に八石を列す。楼前一行と楼左一行とは低きこと一級なり。前後に踏みて二十歩、左右に踏みて三十五歩あり」。

このデータを現在の礎石の配置に重ねると、彼が南門から中門を経て正殿に至ったことがうかがえますが、中門付近では礎石がわずか二つしか数えられていません(傍点)。日記の記述からは、当時全部で何個の礎石が残っていたのか定かではありませんが、九州歴史資料館の報告書によると、明治23(1890)年の調査では105個の礎石が数えられています。また、鷗外が政庁跡を訪れた頃は、現在ある三つの碑のうち、まだ太宰府碑(亀井南冥撰)はなく、日記には都督府古趾碑(高原善七郎建)と太宰府址碑(渡辺清撰)の2碑のみが「近ごろ」建てられたものとして記されています。

蒿茨の裏に隠れた礎石を求めて歩く鷗外は、その石上に何を見ていたのでしょうか。